

NEWS

今シーズンのインフルエンザ治療指針を発表

日本小児科学会、ゾフルーザは「小児への積極的な投与を推奨しない」

2019/10/23

[増谷 彩 = 日経メディカル](#)

日本小児科学会は10月21日、「**2019/2020シーズンのインフルエンザ治療指針**」を発表した。インフルエンザ治療指針は、同学会の新興・再興感染症対策小委員会などがまとめたものだ。

(1) 一般診療における治療、(2) ノイラミニダーゼ (NA) 阻害薬に耐性を示すインフルエンザウイルスによる重症例への対応、(3) インフルエンザワクチンの推奨——の3項目で構成している。昨シーズンの治療指針との差分として、治療薬に関する新たな情報と、今シーズンのインフルエンザワクチン (株) について情報を追記した。

治療薬のオセルタミビル (商品名タミフル)、ザナミビル (リレンザ)、ラニナミビル (イナビル)、ペラミビル (ラピアクタ) については昨シーズンと同様の記述だが、今回、バロキサビルマルボキシル (ゾフルーザ) が加わった。ゾフルーザは、小児でも体重が10kg以上であれば適応となる。

ゾフルーザの推奨については、「同薬を小児患者に広く使用するにあたっては、現時点で懸念事項が2つある」とし、(1) 小児においても有用であると想定されるものの、幅広く推奨を行うだけのデータ集積がない状況であること、(2) 治療中にインフルエンザウイルスのポリメラーゼのPAサブユニットにおけるI38X変異を有する耐性ウイルスが出現すること——を挙げた。こうした懸念点から、同委員会では「12歳未満の小児に対する同薬の積極的な投与を推奨しない」とした。また、「現時点では同薬に対する使用制限は設けないが、使用に当たっては耐性ウイルスの出現や伝播において注意深く観察する必要があると考える」と慎重な見方を示した。

■ 参考情報

【日本小児科学会】[2019/2020シーズンのインフルエンザ治療指針](#)